

演題名：当帰四逆加呉茱萸生姜湯の煎じ方法の違いによる味と成分の比較検討

ミキ調剤薬局 加藤香里

【目的】

漢方の古典である『傷寒論』には水以外のものを入れて煎じる方法の記載がある。そこには何か意味があると思われる。例えば、当帰四逆加呉茱萸生姜湯の条文には「右九味、以水六升、清酒六升、和煮取五升、去滓、分温五服。」とあり、水と酒を同量用いて煎じていたことが窺える。そこで実際に、本方を水で煎じた煎液と水＋酒で煎じた煎液の味と成分を比較検討した。

【方法】

(1) 医療スタッフ 22 名を対象として、当帰四逆加呉茱萸生姜湯を水＋酒(等量)で煎じた煎液を X とし、当帰四逆加呉茱萸生姜湯を水で煎じた煎液を Y とした。被験者に X・Y が酒煎か水煎か伏せた単盲検試験とした。

被験者を A 群・B 群に分け、A 群：X 服用後に Y を服用。B 群：Y 服用後に X を服用。服用後、アンケートに記入。アンケート項目は 1 飲みやすい 2 苦い 3 甘い 4 辛い 5 酸っぱい 6 塩鹹い 7 香りがよい、以上 7 項目を五段階評価とし、四肢の冷えの有無の項目も設けた。

(2) X と Y を HPLC クロマトグラムにより成分分析を行った。

【結果】

(1) アンケートを集計し、平均点を比較：Y の方が飲みやすくより甘みを感じ、X の方が飲みにくい香りがよく、より苦味・辛味を感じた結果となった。冷えの有無で集計を分けて比較したところ(冷えあり 10 人、冷えなし 12 人)、冷えあり群は飲みやすさと苦味は XY ほぼ同じで X の方が辛い。冷えなし群は Y が飲みやすく X は苦く辛いという結果だった。

(2) 各種成分の HPLC クロマトグラムによる比較：抽出された分量は、グリチルリチン酸は X でやや減少し、ペオニフロリン、ケイヒ酸、についてはほとんど差がみられなかった。ケイアルデヒド及び [6]ーギンゲロールにおいては X で増加した。

【考察】

X(水＋酒)がY(水)よりも、辛味を感じたという結果から、酒で煎じることによって辛味成分がより抽出されたと考えられる。Xにおいて、冷えあり群が飲みやすく、冷えなし群が苦味を強く感じた事は、冷えあり群が「手足厥寒」に該当するためと考えられ、証と味に関連性がうかがえる。当帰四逆加呉茱萸生姜湯や呉茱萸湯の服用歴がある被験者からは、Xは呉茱萸のえぐ味が少ないという意見があった。えぐ味は、強い苦味と渋みが混ざった味と考えられ、Yで苦味が強く感じたのは、えぐ味が原因と考えられる。苦味に関しては、アンケートの点数結果と自由記載内容に差があり、えぐ味を含めて精査する必要がある。

当帰四逆加呉茱萸生姜湯を原典に記載されている等量の水＋清酒で煎じることにより、辛味成分がより抽出され、冷えに対する効果が推測された。